

横浜市インフルエンザ流行情報 12号

横浜市衛生研究所 / 横浜市健康福祉局健康安全課

【警報発令中】 報告数は減少しましたが、依然として例年のピーク時の報告数を上回っています。

【概況】

横浜市全体の第6週(2月5日～11日)の定点^{※1}あたりの患者報告数は、**48.78**となり、第5週の67.58^{※2}より減少しましたが、依然として例年のピーク時の報告数を上回った状態が続いており、引き続き注意が必要です。

年齢別では、15歳未満の報告が全体の7割以上を占めています。また、学級閉鎖等の報告件数は、第6週で減少したものの、例年のピーク時を上回っている状態が続いています。保育園での集団発生の報告が続いており、お子さんがいるご家庭での感染予防が重要です。

また、高齢者施設での集団発生の報告が続いています。各施設での持ち込み防止や感染拡大防止対策を徹底しましょう。

迅速診断キットの結果は、第6週では **A型 21.3%**、**B型 78.4%**と、B型が多く報告されています。例年と比べてB型の流行が早いため、一度B型にかかったことがある人がA型にも感染したり、A型とB型に同時にかかる可能性もあり、注意が必要です^{※3}。

今後も引き続き、正しい手洗い^{※4}等や、咳が出る時のマスクの着用及び早期受診などの対策^{※5}が重要です。

※1 定点とは、定期的にインフルエンザ患者発生状況を報告していただいている医療機関(市内153か所)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。

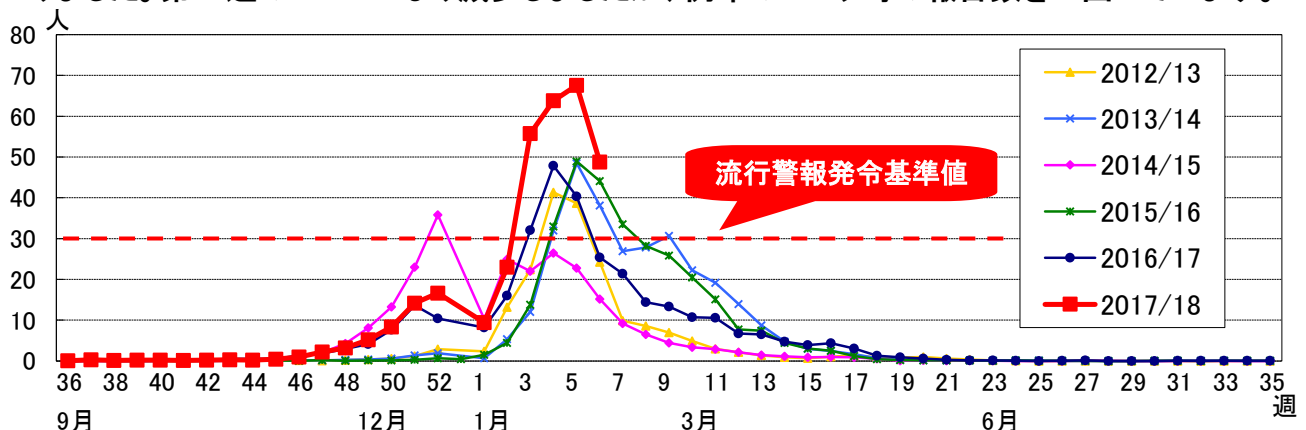
※2 追加報告があったため、以前お知らせした情報から報告数が更新されています。

※3 [2017/18シーズンの山形系統のB型インフルエンザ流行状況—横浜市](#)

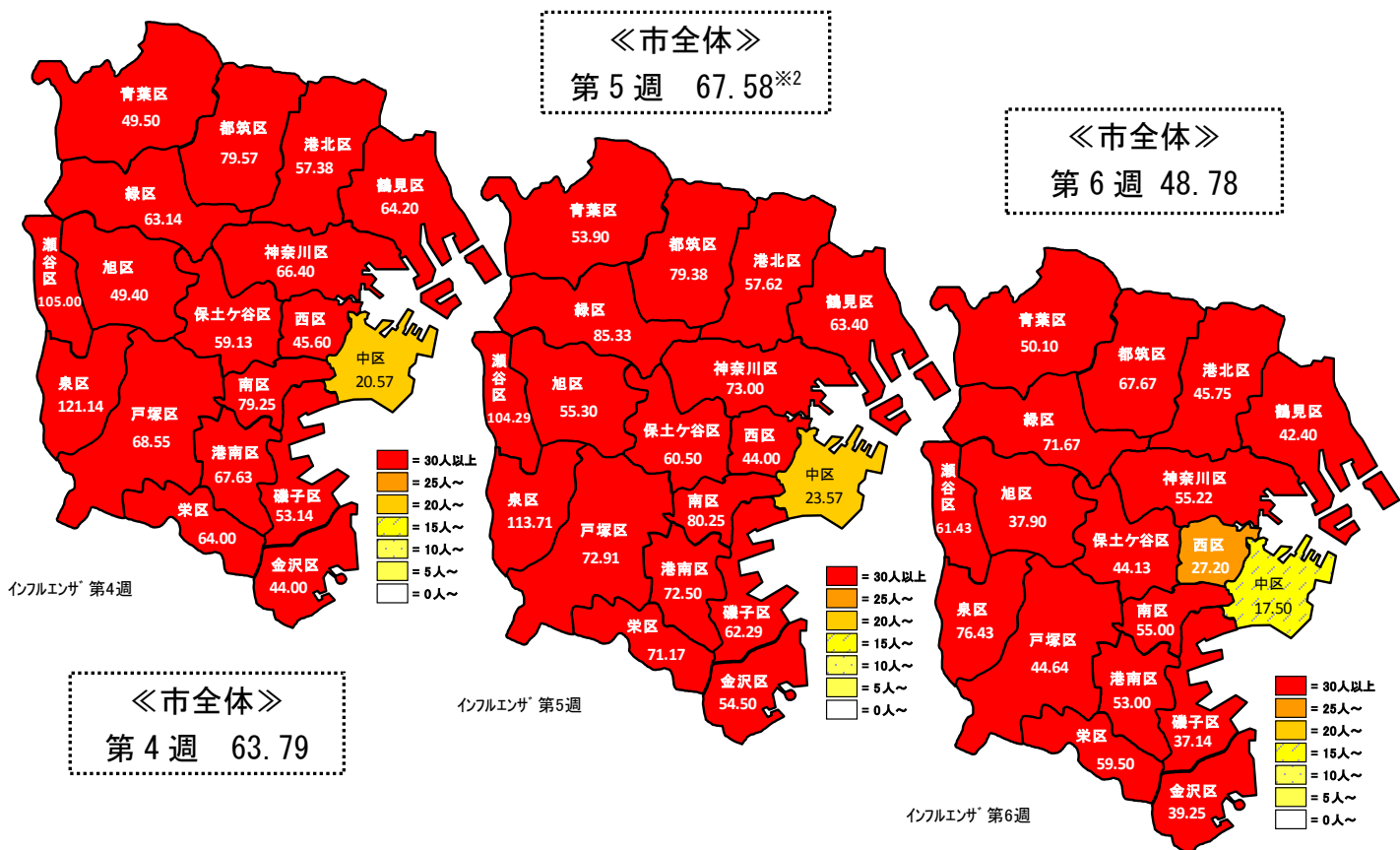
※4 [横浜市保健所ホームページ](#)(「正しい手洗い方法」および、掲示用ポスター「石けんで『手』を洗おう」をトップページに掲載しておりますので、是非ご活用ください)

※5 [市民向けインフルエンザ予防チラシ\(横浜市\)](#)

1 市内流行状況:市全体の定点あたりの患者報告数は、第6週(2月5日～11日)で48.78となりました。第5週の67.58^{※2}より減少しましたが、例年のピーク時の報告数を上回っています。



2 地図で表した直近 3 週間の区別流行状況(塗り分けの数字は定点あたり報告数)

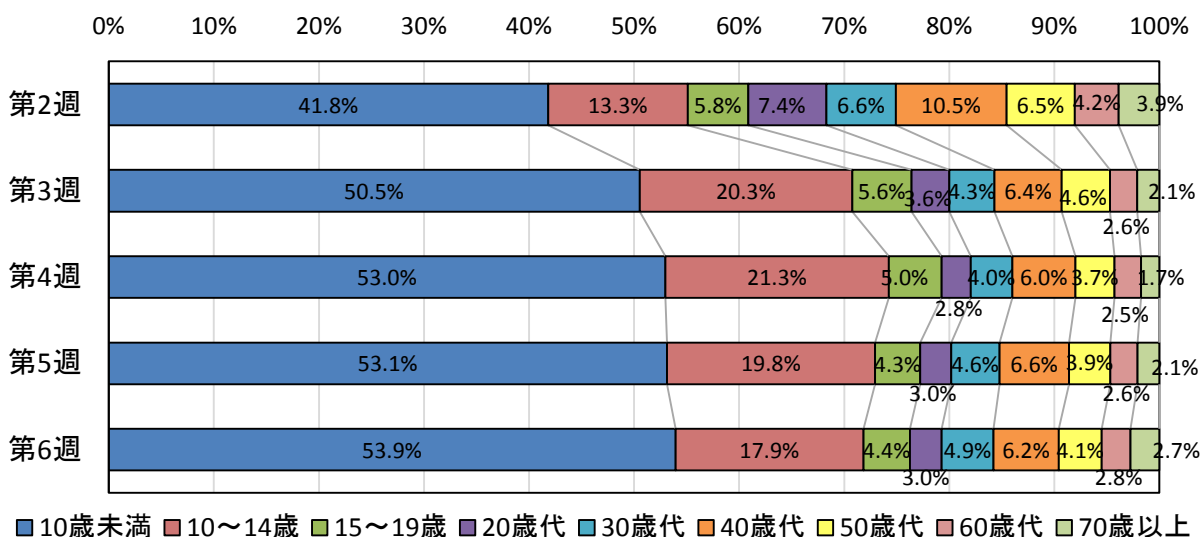


第3週にて、市内全体で定点あたり 30.00 を超えたため、流行警報が発令されています。流行警報は、警報継続基準値 (10.00) を下回るまで続きます。

昨シーズンは第3週に定点あたり 32.23 にて流行警報が発令され、第12週 (2017年3月20日~26日) に解除されています。

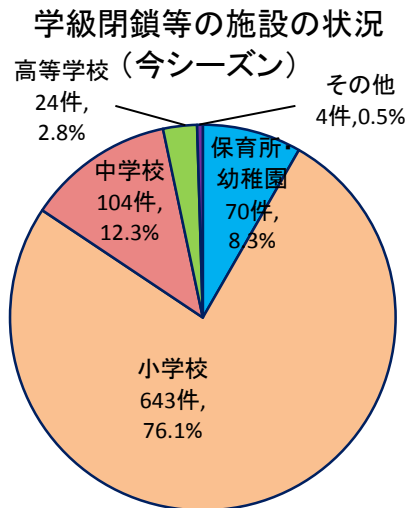
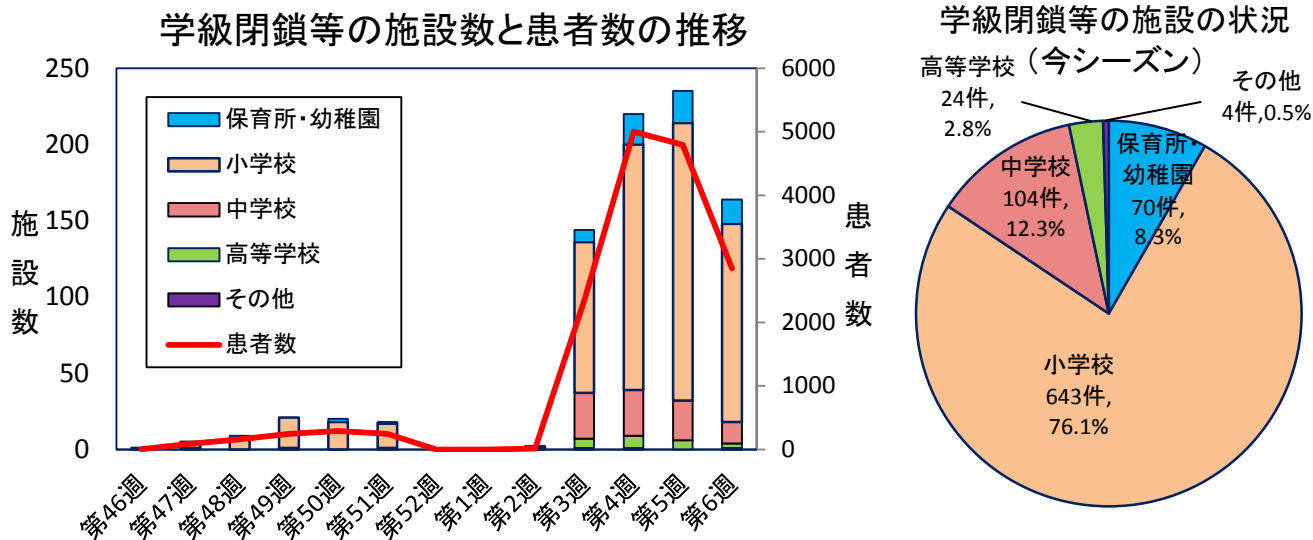
3 年齢層別集計: 第6週の患者年齢構成は、10歳未満が全体の53.9%、10歳以上15歳未満が全体の17.9%を占めており、15歳未満が全体の71.8%を占めています。また、60歳以上は全体の5.5%となっています。

年齢層別患者割合



4 市内学級閉鎖等状況:学級閉鎖等の報告は、第6週で164件(休校1件、学年閉鎖21件、学級閉鎖142件)、患者報告数2,851人となり、第5週より減少しましたが、依然として昨シーズンのピーク時の報告件数を上回っています。内訳は、保育所・幼稚園16件、小学校130件、中学校14件、高等学校3件、その他1件です。

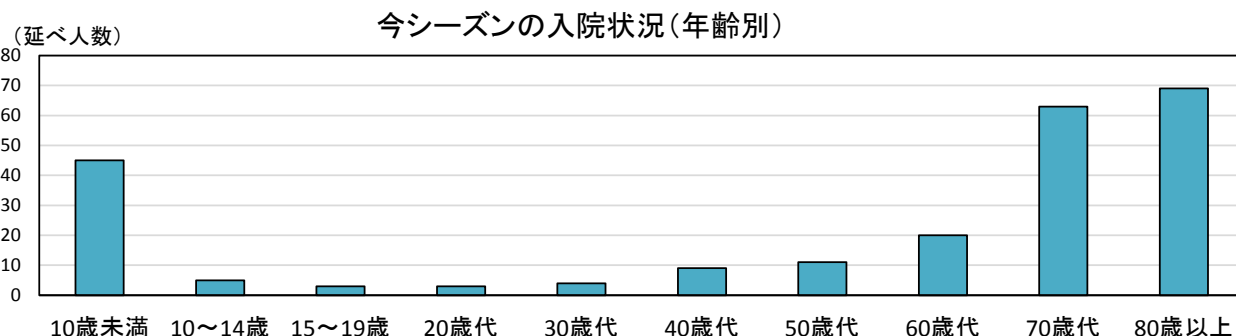
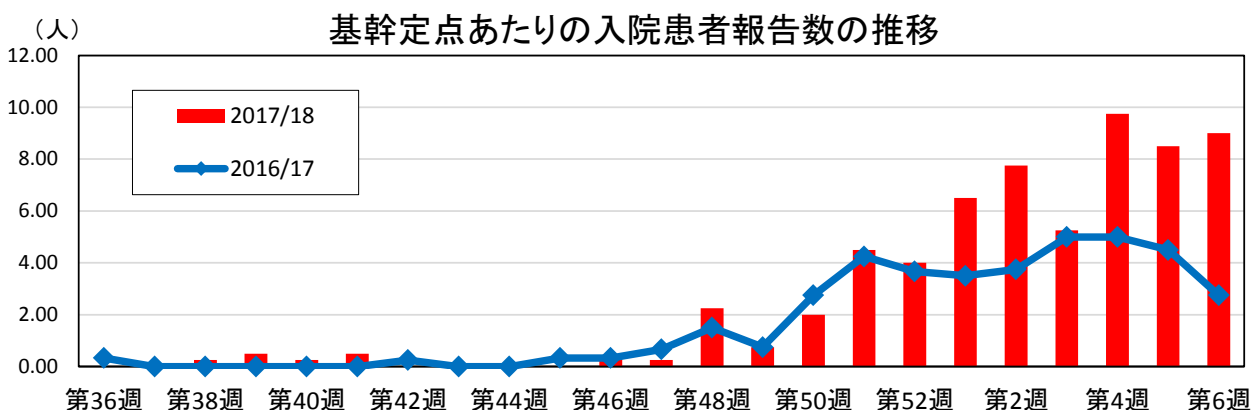
今シーズンの第6週までの報告は累計845件、患者数は延べ16,129人で、施設の割合は、保育所・幼稚園8.3%、小学校76.1%、中学校12.3%、高等学校2.8%、その他0.5%となっています。



5 入院サーベイランス:市内基幹定点医療機関^{※6}におけるインフルエンザ入院患者は、第6週は27人の報告があり、累計232人となりました。うち、15歳未満が50人、60歳以上が152人となっており、小児と高齢者の報告が多くなっています。

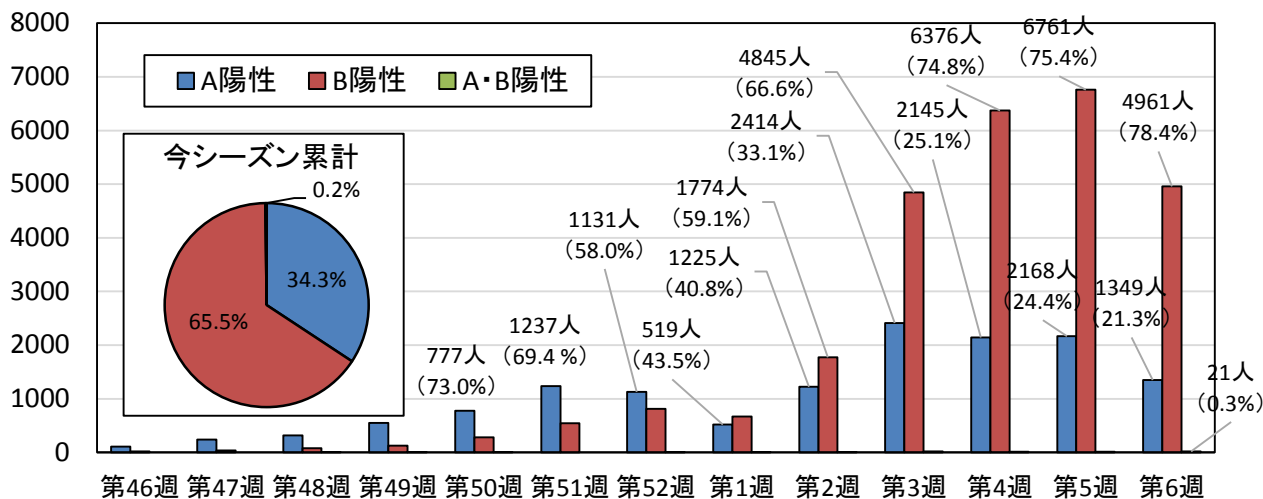
入院時の診療内容が把握されている事例で、ICU入室、人工呼吸器の使用、頭部CT検査、脳波検査等が実施された重症肺炎やインフルエンザ脳症が疑われる入院患者は、第6週では6人の報告がありました(ただし、インフルエンザ脳症の発生届はありませんでした)。

※6 基幹定点:患者を300人以上収容する病院(小児科医療と内科医療を提供しているもの)の中から、地域ごとに指定された医療機関のことで、市内には4つの基幹定点があります。



6 迅速キット結果:今シーズンの初めは A 型が多く報告されてきましたが、第 50 週頃より B 型の割合が増え始め、第 1 週で逆転しています。第 6 週の迅速キットの結果では、A 型 21.3%、B 型 78.4%、A・B 型ともに陽性 0.3%となり、B 型の割合がさらに増加しています。今シーズン累計は、A 型 34.3%、B 型 65.5%、A・B 型ともに陽性 0.2%となっています。

横浜市の患者定点医療機関における
迅速診断用キットによる型別の報告数(人)



7 市内病原体検出状況:市内では病原体定点^{※7}から AH1pdm(48 株)、AH3(37 株)、B(山形系統)(72 株)が分離・検出されており、B(山形系統)が多くを占めています。AH1pdm の分離・検出は減少していますが、AH3はシーズンを通じて一定数が分離・検出されています。全国での分離・検出も同様の傾向と考えられます^{※8}。

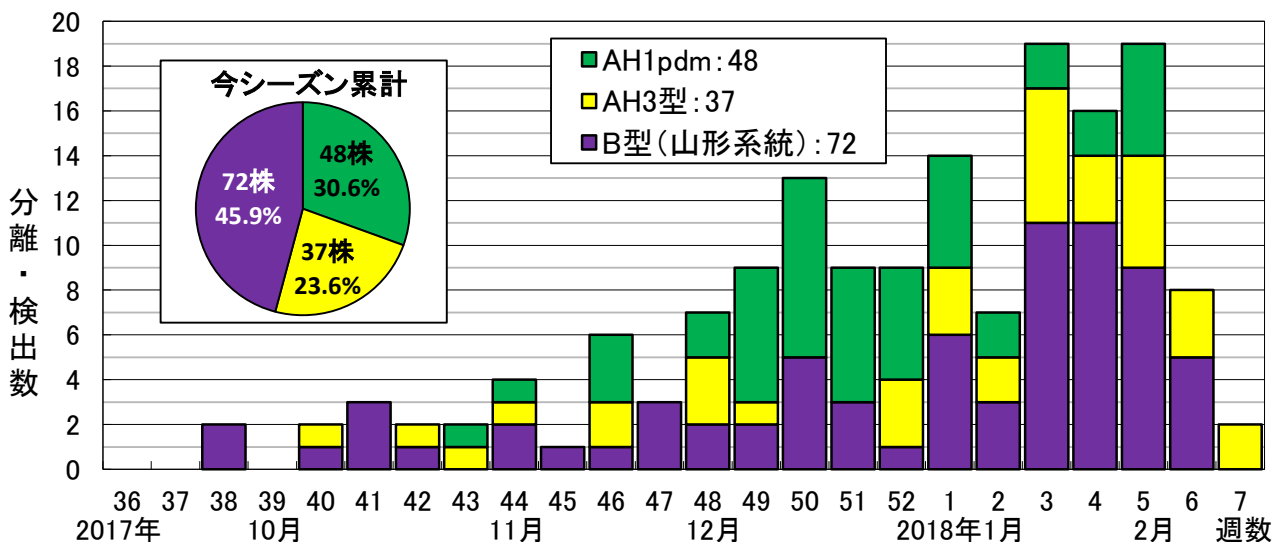
B 型ウイルスの流行が早期に始まっていることから、A 型ウイルスとの再感染や重複感染にも注意が必要です^{※3}。

※7 病原体定点:採取した検体を衛生研究所に送付する医療機関で、市内に 17 か所あります。うち、インフルエンザについては 12 か所にて採取されています。

※8 週別インフルエンザウイルス分離・検出報告数(国立感染症研究所、2018 年 2 月 9 日作成)

市内病原体定点からのインフルエンザウイルス分離・検出状況

(2018 年 2 月 14 日現在)



8 分離株の抗原性解析:市内で分離された株(細胞培養した 199 株、2 月 14 日現在)のワクチン株との抗原性解析(HI 試験)を実施しました。ワクチン類似とされているのは 4 倍以内です。あくまでもウサギの血清を使っているため参考値ですが、AH3 は、24 株のうち 21 株が 8 倍以上で、AH1pdm(98 株)と B 山形系統(77 株)は、すべて 4 倍以内となっています。これは、AH3 の 94%が 8 倍以上で、AH1pdm および B 山形系統のすべてが 4 倍以内であったという国立感染症研究所の結果^{※9}と矛盾しないと考えられます。

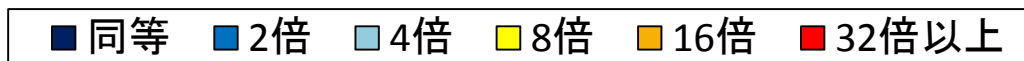
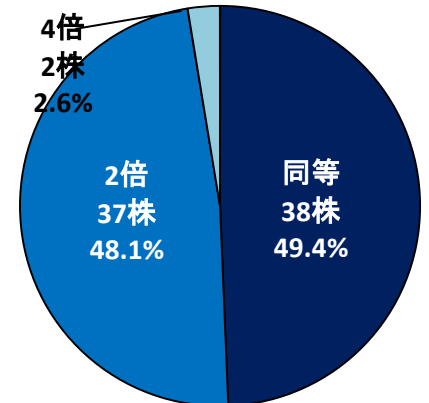
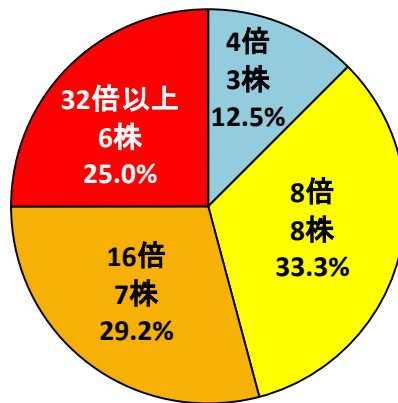
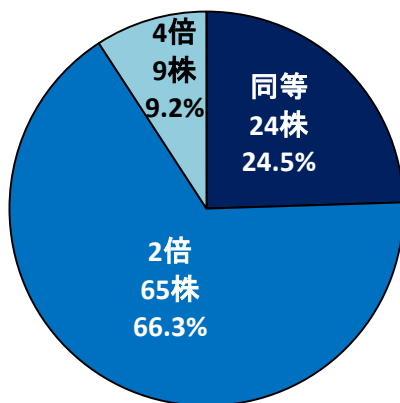
※9 [インフルエンザウイルス流行株抗原性解析と遺伝子系統樹 2018 年 1 月 29 日\(国立感染症研究所\)](#)

(参考値)市内で分離された株の抗原性解析

AH1pdm 抗原性解析(98 株)

AH3 抗原性解析(24 株)

B 山形系統抗原性解析(77 株)



インフルエンザウイルス(AH3 型)
の電子顕微鏡写真(3 万倍)

撮影:
横浜市衛生研究所



※参考リンク 近隣自治体の流行状況 ○神奈川県 ○川崎市 ○東京都
全国の流行状況 ○国立感染症研究所

【お問い合わせ先】 横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課 TEL 045(370)9237
横浜市健康福祉局健康安全課 TEL 045(671)2445